

優秀作品賞  
「弟の病気」

三浦 紀子さん

弟は末期ガン患者だ。激しい頭痛を訴えて病院に行ったときには、浸潤性の神経膠腫ステージ4だった。「余命は一年から一年半です。」医師の言葉に両親は絶句、私はその言葉を現実として受け止められず茫然とした。

弟の夢は一流の航空機整備士になることだ。航空会社に勤務する父を尊敬し、自らも空と繋がる仕事を選んだ自慢の弟。念願だった大手航空会社のスカウトを受け、二か月後から始まる新天地での仕事に心躍らせていた矢先だった。転職を機に、長くお付き合いしていた女性との入籍も予定していた。正しく、幸せの絶頂にいたのだ。

弟は自分の状況を完全には知らない、いや知り得ない。病名とその症状、予後の説明をしても翌日には忘れてしまうからだ。「今後どんどん記憶は失われていきます。そのうちGPSがないと家にも帰れなくなるでしょう。」医師の言葉はすぐに現実の症状となって表れた。自分の置かれた状況を知らない弟は、結婚と転職という新生活への希望に満ち溢れている。「姉さん、俺まだ退院できないのかな。もう結構元気だぜ。早く仕事を始めたいんだよ。あそこで経験を積みれば日本有数の整備士になれる。楽しみに待ってろよ！」と瞳を輝かせて語る弟を前に、涙を堪え、「とにかく頑張らないとね。簡単な道じゃないんだから。」と応えるのが精一杯。当然だが、転職の話は健康面の理由で立ち消えとなっていた。

弟は人間ドックを受診したことがなかった。健康診断よりも仕事優先、一分一秒惜しんで、仕事と資格試験の勉強に取り組んでいた。私は後悔している。仕事に励む弟を無条件にバックアップしていた自分を呪っている。健康でなければ夢を追うことさえ叶わない。そんな当たり前のことを私は弟に伝えてこな

かった。祖父母を癌で失い、父も癌経験者。早期に発見出来ていれば祖父母が亡くなることはなかった。父の癌もずいぶん進行してからの発見で、それはそれは大変な思いをし、その教訓から夫婦揃って毎年の健診を欠かしていない。これらを間近に見つめながら、どうして弟と私はその教訓を活かそうとしなかったのか。「俺、バカだったな。せめて一年に一日でも身体のための時間を作ればよかった。早い段階での発見なら、俺、元気で生きられたのかな。」、予後の説明をしたその日、弟は決まって後悔の念を口にし、涙する。翌日には記憶がないので、これが繰り返される。

人は皆、オニヤーと泣いて母の胎内から生まれ落ちる。五体満足であることがこの世で起こる最初の奇跡。そして、日々の、時に忙しい暮らしの中で心身健康でいられる事、これが次なる奇跡。そう、五体満足で産声をあげることも、心身ともに健康で過ごせることも、どちらも素晴らしい奇跡なのだ。決して、等しく与えられた権利ではない。こんな大切なことに、ここまで追い込まれなければ気づけなかった己の愚かさに吐きそうになる。祖父母と父の様子を間近に見て、人間ドックの意義を強く認識しながら、なぜそれを実践しなかったのだろう。

両親も私も、弟の婚約者も、弟が生きる道を必死に模索している。タイムリミットは設定されている、止まってはいられない。みっともなく泣きながらも進むしかない。知り合いのツテを頼って、神経膠腫手術のプロフェッショナルに繋がるよう手を尽くし、癌研究の最高峰機関へのダイレクトアプローチも試みている。誰ひとり弟の「命」を諦めていない。ただ、それでも、人間ドックを受けさせなかった自分たちの愚かさを呪わない日はない。こんな苦しい思いは二度としたくないから、先日、私は主人と連れだって人間ドックを受診した。二人とも問題は見当たらず、一先ず安心して帰宅。両親も、近いうちに受診するらしい。

人間ドックは健康なうちに手を打ってこそ真価を発揮する。病に伏してからでは遅いのだ。気の置けない仲間が弟のお見舞いに来てくれたその日、私は皆

に伝えた。「人はいつどうなるか分からない。健康は決して当たり前じゃないから、みんな、毎年ちゃんと人間ドックを受診してね。これからも元気で付き合いっこう。」